岩手大学への父の思いと喜び

①盛岡高等農林学校（昭和8年～昭和11年）3年間
（1933）　（1936）

盛岡高等農林学校旗

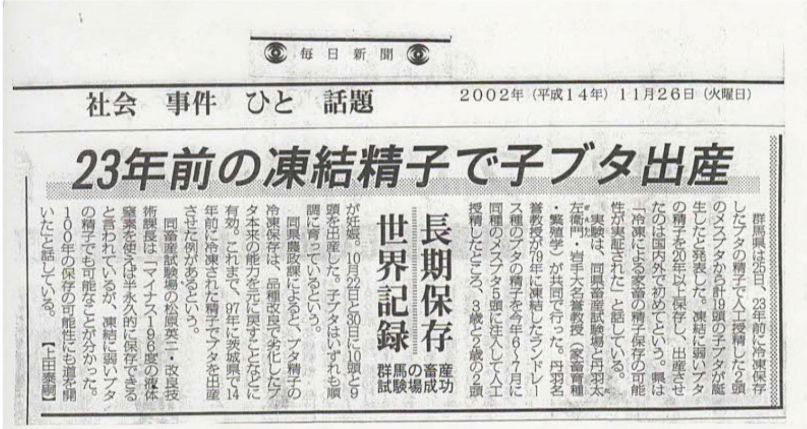
大正時代の校舎

昭和10年頃の正門（父、在学中）
後に重要文化財指定

門番所　後に重要文化財指定

②岩手大学教授時代（昭和42年～昭和56年）14年間
（1966）　（1980）

盛岡高等農林学校時代の本館講堂が重要文化財の指定を受ける　1994年（平成6年）
（丹羽太左衛門　北水会会長の時）



毎日新聞

社会　事件　ひと　話題　　2002年（平成14年）11月26日（火曜日）

23年前の凍結精子で子ブタ出産

長期保存 世界記録

群馬の畜産試験場 成功

群馬県は25日、23年前に冷凍保存したブタの精子で人工授精した2頭のメスブタから計19頭の子ブタが誕生したと発表した。凍結に弱いブタの精子を20年以上保存し、出産させたのは国内外で初めてという。県は「冷凍による家畜の精子保存の可能性が実証された」と話している。

実験は、同県畜産試験場と丹羽太左衛門・岩手大名誉教授（家畜育種・繁殖学）が共同で行った。丹羽名誉教授が79年に凍結したランドレース種のブタの精子を今年6～7月に同種のメスブタ5頭に注入して人工授精したところ、3歳と2歳の2頭が妊娠。10月25日と30日に10頭と9頭を出産した。子ブタはいずれも順調に育っているという。

同県農政課によると、ブタ精子の冷凍保存は、品種改良で劣化したブタ本来の能力を元に戻すことなどに有効。これまで、97年に茨城県で14年前に冷凍された精子でブタを出産させた例があるという。

同畜産試験場の松原英二・改良技術課長は「マイナス196度の液体窒素を使えば半永久的に保存できると言われているが、凍結に弱いブタの精子でも可能なことが分かった。100年の保存の可能性にも道を開いたと話している。【下田泰樹】

朝日新聞

2002年（平成14年）11月26日　火曜日

品種改良これでトントン拍子？
23年前の凍結精子で子豚出産

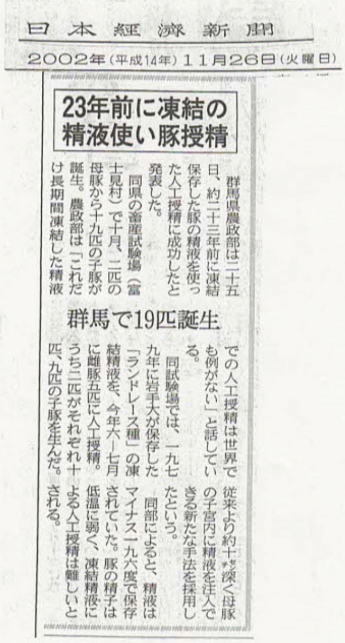
群馬の試験場

群馬県畜産試験場は25日、23年前に凍結した豚の精液を人工授精して、子豚を出産させることに成功したと発表した。20年以上前の凍結精液で豚の人工授精に成功したのは珍しい。農水省は「品種改良に欠かせない優良種の長期保存が可能になった」と評価している。

同県によると、今年6月から7月にかけて雌5匹に人工授精し、うち2匹が9月に計19匹の子を産んだ。

従来の方法では、精子を子宮の入り口までしか送れなかったため、活性が落ちた冷凍精子では授精が難しかった。新たに開発された器具を使って受精に成功したという。

県によると技術が実用化されれば、種豚飼育を減らして経費を削減したり、伝染病被害を減らしたりできるという。



日本経済新聞

2002年（平成14年）11月26日（火曜日）

23年前に凍結の精液使い豚授精

群馬で19匹誕生

群馬県農政部は二十五日、約二十三年前に凍結保存した豚の精液を使った人工授精に成功したと発表した。

同県の畜産試験場（富士見村）で十月、二匹の母豚から十九匹の子豚が誕生。農政部は「これだけ長期間凍結した精液での人工授精は世界でも例がない」と話している。

同試験場では、一九七九年に岩手大が保存した「ランドレース種」の凍結精液を、今年六～七月に雌豚五匹に人工授精。うち二匹がそれぞれ十一匹、九匹の子豚を生んだ。

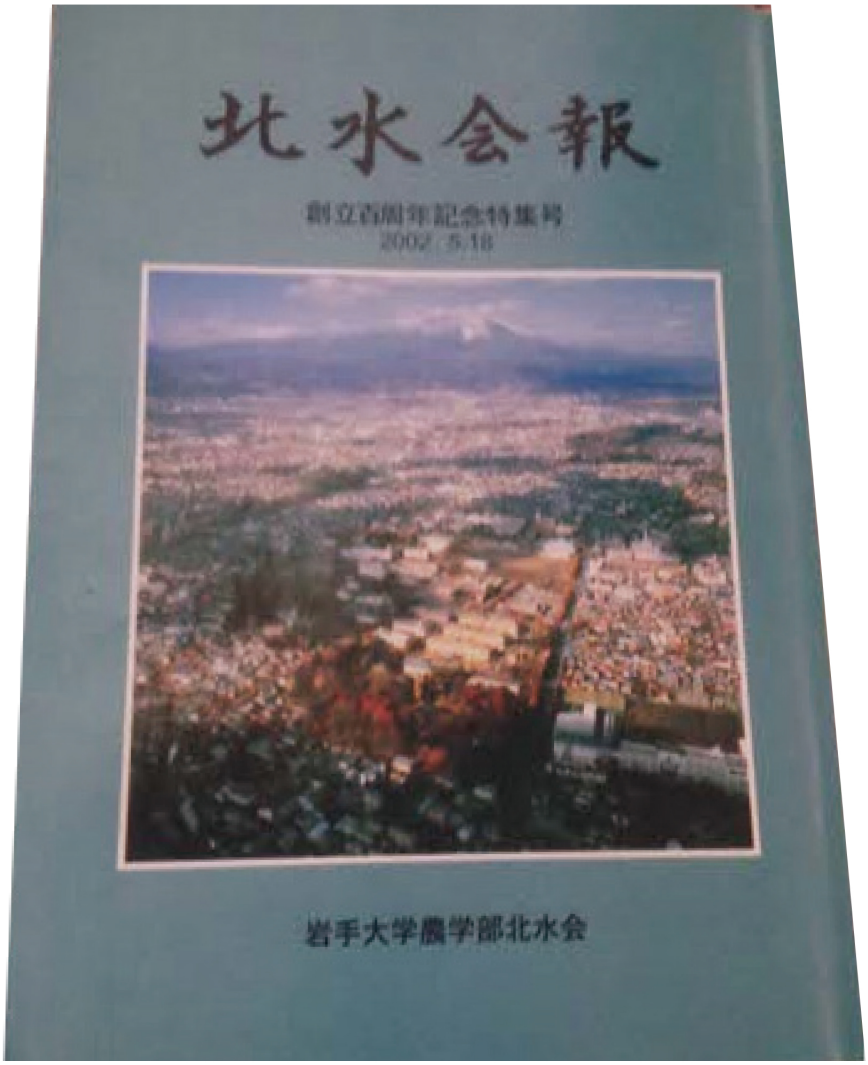
従来より約十センチ深く母豚の子宮内に精液を注入できる新たな手法を採用したという。

同部によると、精液は「マイナス一九六度で保存されていた。豚の精子は低温に弱く、凍結精液による人工授精は難しいとされる。

父と母

岩手大学の桜と

③北水会会長・名誉会長時代　　会長（昭和61年～平成8年）10年間
名誉会長（平成8年～平成28年）20年間

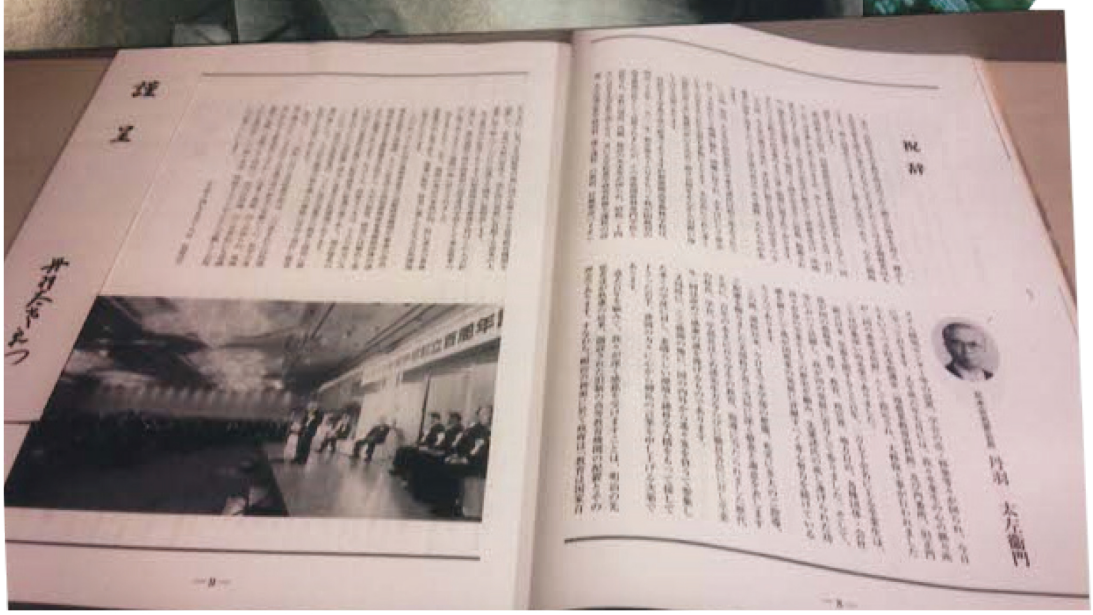


多数の方々のご寄付で刊行されました

題字は丹羽太左衛門　自筆
（父の希望はこの会報を棺に入れることでした）

④北水会名誉会長時代　（平成8年～平成28年）
（1996）　（2016）

創立100周年記念　平成14年
（2002年5月）



2002年（平成14年）5月19日（日曜日）　岩手日報

27年ぶりの盛岡、恩師、級友
元留学生　岩手大100周年に参加

盛岡市内のホテルで十八日開かれた、岩手大農学部百周年の祝賀会にマレーシアから同大畜産学科に留学していたローレンシンさん(五六)が参加。当時の恩師やクラスメートと二十七年ぶりの再会を喜び合った。

ローレンシンさんはマレーシアの高校を卒業後、台湾大学獣医学科に入学。マレーシアの畜産試験場で一年間技師として働いた後、一九七三年に日本政府の国費留学生として来日した。

「人工授精を学びたい」と思っていたローレンシンさんは、人工授精の国際的権威である丹羽太左衛門岩手大名誉教授(八七)の存在を知り同大入学を希望。家畜繁殖学研究室の研究生となり、豚の精子凍結技術を研究した。

祝賀会で丹羽教授と再会したローレンシンさんは「百周年という記念の日に先生やクラスメートの元気な姿が見られてうれしい」と感激。丹羽教授も「研究熱心で優秀な生徒だった。農学部で学んだ技術を生かした研究を続けているようで誇らしい」と顔をほころばせた。

ローレンシンさんは「盛岡の人たちは温かくてワンダフル。大好きな場所と人たちにまた会えてうれしい」と久しぶりの古里を懐かしんでいた。

ローレンシンさんは、現在米国テキサス大で皮膚がん治療の研究をしている。

再会を喜び合うローレンシンさん（左から4人目）と恩師の丹羽太左衛門教授（同5人目）

うれしい教え子との再会

石割桜　　岩手のシンボル

絵　　雨森俊彦氏

（父の郷里の名士）